太郎代天曝観音がやって来たワケは、1つじゃない？

■伝説①

天正年間（1573〜92）異人僧が塔婆山へ来て、「この地のために観音像を贈らん」と言って去りました。翌年、観音像を積んだ異国船が太郎代沖にさしかかると、風はあるのに進まなくなりました。そのとき船頭に「こここそ結縁の地である、我を陸揚げせよ」とのお告げがありました。そこで、観音像を浜に揚げると、船は進むことができたそうです。

里人は、観音像を村の鎮守の境内へ安置しました。すると、一夜にして像が倒れたり、場所を変えたりして安住しません。里人は僧が約束した観音様はこれに違いないと悟り、塔婆山に移しお堂を建てました。しかし、今度は風もないのにお堂の屋根が飛び、幾度建て替えても同じでした。とうとう里人が観音様を天曝しにすると、それ以来、平安な日が続いたということです。

太郎代天曝観音

■伝説②

観音様は、大船に乗せられて、中条の乙宝寺へ行くために沖を通ったのですが、太郎代の沖まで来たらどうしても動かないので、浜に降ろしました。昔、義経の家来がこの地で死んだので、塔婆を立てた場所に観音様を安置したら良かろうというので、ここに祭ることにしました。観音様には、昔から屋根がかかっていません。屋根をかけると一夜のうちに、屋根がひっくりかえってしまうからです。

■伝説③

1662（寛文2）年、陸奥の人々は前九年の役（1051〜62）で滅ぼされた安倍貞任の霊を慰めようと、観音石像を船で運んでいました。太郎代の沖にさしかかると、「貞任の霊を慰めるよりも、この地に尽くした齋藤太郎太の霊を弔え」とのお告げによって、船は進まなくなりました。船長はしかたなく石像をこの浜に陸揚げして帰っていきました。

村人たちは、この石像を村の鎮守の境内にお堂を建てて安置しましたが、風もないのに度々お堂の屋根が飛んだり、石像がときどき倒れたりしました。そのため、太郎太の墓所の脇に移し、天曝しのまま立ち姿で安置しました。

伝説①：「新潟市合併町村の歴史 第2巻」より
伝説②：「新潟市史　資料編10」より
伝説③：「齋藤太郎太翁鎮魂碑」より

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。

コラム 太郎代の齋藤太郎太 ～実在したのか、しないのか～

齋藤太郎太翁鎮魂碑

おはなしに関係する人物

齋藤太郎太…太郎代の元祖といわれる。加茂次郎義綱の家臣で、学問、武芸に優れた勇士。

加茂次郎義綱…？～1134　源義綱のこと。平安時代後期の武将。前九年の役では兄 義家（八幡太郎）とともに安倍貞任を討つ。一時、佐渡に流された。実在の人。

安倍貞任…？～1062　陸奥国の豪族。前九年の役で捕らえられ死亡。実在の人。

黒鳥兵衛…安倍貞任の残党で、越後に乱入し、悪事の限りを尽くした。身長約2.4mの大男で、妖術を使うという伝説の人。

天曝観音や鎮魂碑のある塔婆山金龍庵

太郎代の元祖「齋藤太郎太」にまつわる伝説は、歴史上の人物も登場する不思議なおはなしです。

前九年の役（1051～1062）後、1109（天仁元）年、加茂次郎義綱が、無実の罪で佐渡へ流罪となりました。腹心の家来8人も供をして、佐渡に渡りました。このなかに太郎太もいました。

太郎太は、後に義綱と共に本土へ戻ると、兇賊と恐れられた黒鳥兵衛を打ち滅ぼしました。そしてこの地で善政を行い、住民の信頼と尊敬を集めました。太郎太は時の守護の命により、周辺の大庄屋を束ねる大里正となり、村人のために漁業・農業を奨励し、水防・灌漑及び道路整備などを行いました。

太郎太が亡くなると、村の人々はその亡骸を、現在、太郎代観音像が安置されている場所へ塔婆をたてて埋葬しました。そして、そこを塔婆様と呼んで参詣したということです。

人々は、太郎太の徳を慕い、感謝し、この地を太郎太浜と言うようになったそうです。また、太郎太の子孫の名が太郎太夫と言ったので、太郎太夫浜とも呼んだそうです。これらが、のちに太郎代浜（今の太郎代）と呼ばれるようになったといわれています。

さて、齋藤太郎太は実在の人物だったのでしょうか。伝説と史実の間にあって、これからも地域のなかで伝えられていくことでしょう。

『北区お宝ものがたり』は、博物館などで1冊800円で頒布しています。